



Title	海外調査活動記録 2011年度・2012年度・2013年度
Author(s)	大坪, 慶之; 片山, 剛; 山本, 一
Citation	近代東アジア土地調査事業研究ニュースレター. 2014, 5, p. 85-99
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60298
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

海外調査活動記録

大坪慶之・片山剛・山本一

はじめに

2011年11月に追加採択された本科研プロジェクトは、初年度末の2012年2~3月に台湾で海外調査を実施し、2012年度からは毎年調査先として台湾・南京・広東の3箇所を設定し、史料調査・実地調査（採訪や農村踏査）を行っている。

台湾では、民国期の土地制度関係の史料だけでなく、民国期の南京市街地における一筆ごとの土地に関する登記文書（我々は「一件文書」と呼んでいる）や、地籍図作製の前段階に作製されたと思われる、空中写真から作製した青焼きの地図など、幅広い史料の収集を行っている。南京では、档案館などで史料を収集するとともに、主な研究対象である南京市郊外に位置する長江の中洲へ赴き、古者の採訪や実地踏査によって土地利用のあり方などを調査している。また広東では、前科研で採訪を行った金利鎮を訪れて再度古者を探訪し、「村の土地」の存否について、詳細な知見を得ている。それぞれの現地の先生方や政府の協力もあり、海外調査では大きな成果を得ている。ここに謝意を表したい。

以下は、それぞれの海外調査活動の記録である。なお本ニュースレター脱稿後、2014年3月に片山剛・山本一が広東省での調査活動を予定していることを附言しておく。

2011年度

初年度の台湾調査の主な目的は、①1930年代の南京市市街地における一筆ごとの土地に関する所有権登記（関連して他項権利登記等も）に関する史料の予備調査；②江心洲地籍図関連の地図資料の高画質によるデジカメ撮影；である¹。以下、その調査の概要を記録する。

台湾調査（2月27日～3月5日）

2月27日（月）【関空発⇒台北着】日本航空 JL0813便など

片山剛（大阪大学教授）・小林茂（大阪大学教授）・田口宏二朗（追手門学院大学准教授）・大坪慶之（三重大学准教授）・山本一（大阪大学大学院博士後期課程・特任研究員）・下岸廉（大阪大学学部生）の六名が、関西国際空港・中部国際空港から台北に到着。前日に台北入りしていた荒武達朗（徳島大学准教授）と合流する。宿舎は、福華国際文教会館。

先に活動を開始していた荒武は法務部を訪問する。その結果、戦後の国共内戦期における土地関係の史料が所蔵されていることが判明する。

夜、巫仁恕副教授（中央研究院近代史研究所）と会食。本プロジェクトの趣旨について説明し、研究期間中の協力を依頼する。

¹ 江心洲地籍図は、科研プロジェクト「1930年代広東省土地調査冊の整理・分析と活用」（代表：片山剛／2005～08年度）にて発見し、研究を進めてきたものである。また1930年代の南京市市街地における史料群は、関連するものとして他項権利・地籍図などが存在する。これらの成果については、『近代東アジア土地調査事業研究』2～4、2007～2009年所収の各論考を参照。

2月28日（火） 桃園県

大阪大学文学研究科の略称 OVC プログラム（「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」[日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」]）で台湾に滞在中の波江彰彦氏（大阪大学助教）を加えた総勢八名で、桃園県にある灌漑水路および関連施設の実地調査を行う。午前中は、慈湖で蒋介石の遺体安置所を見学した後、石門水庫へ行き、戦前の日本統治期に作られた桃園大圳と、戦後新たに設けられた石門大圳の取水口を確認する。午後は、観音へ行き桃園大圳を見学した後、水路と一緒に現在も使われているため池の一つである「学校埤」付近を散策する。その後、八徳で桃園大圳のトンネル出口を探すも、市街地ということもあり見つけられなかった。

2月29日（水） 国史館（新北市新店区）

国史館で調査を開始する。南京市では1934年から47年までの期間に、計3回ほど土地所有権の登記・確認が実施された。1930年代中葉に登記の対象となったのは、当時の第一区から第六区の土地である。そして国史館には、土地所有者が登記を行う際に提出した登記申請書や所有権者であることを示す売買契約書等の文書が入れられた档案袋が残されている。その数は、全6区で約一万筆分である。新しく付された档案番号では055000000001Aから055000012198Aまで（旧番号では、321-001から321-1128まで）がこれに該当する。本科研チームは、この档案袋の一袋分を「一件文書」と呼んでいる。片山・小林・荒武・田口・大坪の五名は、12,198件のうち第四区に重点をおいて検索・閲覧を開始した。山本・下岸の両名は、江心洲地籍公佈図および所有権登記関係の史料の写真撮影を行う。今回は、地理学の分野で地図を撮影する方法を波江氏にご指導いただき、EOS Mark IIとマンフロット（カメラスタンドの一種）を用いて模造紙大の地図を高画質で一枚の写真に収めていった。

3月1日（木） 国史館・中央研究院（台北市南港区）

片山・田口・大坪の三名は、昨日に引き続き所有権登記に関する一件文書を閲覧する。また、荒武・山本・下岸の三名は、江心洲地籍図や一件文書の史料を写真撮影する。小林は、中央研究院歴史語言研究所の范毅軍教授を訪問する。

3月2日（金） 国史館・桃園県

片山は、所有権登記関係の史料を閲覧する、田口・大坪は、エクセルファイルで用意してきたフォーマットに、所有権登記に関するデータを入力する。荒武・山本・下岸は、閲覧した資料の中から有用なものを選び出し、写真撮影を継続する。小林は波江氏とともに、桃園大圳の調査を進めるべく、現地の水利組合を訪問する。

夜、片山・小林の両名は、范毅軍教授と会食する。

3月3日（土） 国史館／国立中央図書館台湾分館（以下、台湾分館と略記。新北市中和区）

午前中は、二班に分かれて活動する。片山・荒武・田口・山本・下岸の五名は、国史館にて作業を継続する。小林・大坪の両名は台湾分館に行き、日本による台湾出兵に関する地図を調査する。その結果、同館に新設された台湾学研究所で日本統治時代の地図資料が、多くデジタル化されていることが判明する。午後は、小林・大坪も含めた総勢七名が国史館にて、史料の閲覧・エクセルデータ入力・デジカメ撮影を行う。

3月4日（日） 台湾分館など

小林は、台湾分館にて前日に引き続き、台湾出兵時の地図を閲覧する。残りのメンバーは、台北市内にて、関連図書を購入するなどして過ごす。

この日、荒武が帰国する。

3月5日（月）【台北発⇒関空着】日本航空 JL0816 便など

片山・小林・田口・大坪・山本・下岸の六名が、調査を終えて帰国。

* 2011年度の調査では、1930年代の南京市街地における土地所有権登記に関するデータを約38件収集し、資料群の持つ特徴を一定程度把握することができた。また、新たに導入したEOS Mark IIやマンフロットを用いて、高画質の地図を入手した。

2012年度

1. 台湾調査（2012年8月26日～9月11日）

8月26日（日）【関空発⇒台北着】エバー航空 BR2131 便

この日、稻田清一（甲南大学教授）が台北到着。花蓮での学会報告のため先に台湾に渡っていた片山剛（大阪大学教授）と合流する。宿舎は、福華国際文教会館。

8月27日（月） 国史館（新北市新店区）

片山・稻田は国史館において、2012年3月に開始した一件文書の閲覧とデータ入力の作業を行った。なお今回、データ入力用のフォーマットを改善して作り直した。同時に、本科研プロジェクトにとって有用な史料がほかにないかと探索した。そして、前科研の際に閲覧したことがある、日中戦争後の1940年代後半の第四次土地登記の際に作製された南京市街地の戸地図（一筆ごとの土地を実測して作製され、業主姓名や面積などが記された地籍図。国史館の目録では、「前南京市政府運台地籍及文件移交清冊」では、戸地図を区ごとにまとめ、「第◆区分段地籍図」として分類されている²。第一区から第八区までの旧請求番号は321-1129～321-1136）に改めて照明を当てる必要があることに気がついた。というの

² 以下、「第◆区分段地籍図」とは档案名を、戸地図とは一筆ごとの土地を実測して作製された地籍図を総称して呼ぶこととする。

は、3月から調査を開始した一件文書のなかには1930年代中葉の戸地図が含まれていることが多い。つまり、一件文書のなかの1930年代中葉の戸地図と1940年代後半の戸地図とを対照したり、あるいは相互に補完したりすることで、1930年代～40年代の南京市街地の様相を復元できるかもしれないと考えた次第である。そこで、一件文書と同じく、第四区を対象に「第四区分段地籍図」を閲覧し、戸地図のデータ収集を始めた³。

8月28日（火） 国史館／【関空発⇒台北着】日本航空 JL813便など

片山・稻田は、「第四区分段図」を申請し、史料の残存状況を確認しながら、データ入力のためのフォーマット作成に取りかかった。

この日、小林茂（大阪大学名誉教授）・荒武達朗（徳島大学准教授）・田口宏二朗（大阪大学准教授）・大坪慶之（三重大学准教授）・山本一（大阪大学特任研究員）・下岸廉（大阪大学学部生）が関西国際空港などから台北に到着。片山・稻田と合流する。

8月29日（水） 国史館

総勢八名で、調査を行う。片山・大坪の二名は「第四区分段地籍図」の閲覧およびデータのパソコン入力を行う。荒武・山本・下岸の三名は、閲覧した戸地図の中から重要と目されるものや特徴的なものを選び出してデジカメ撮影を行う。稻田・田口の両名は、南京市・江蘇省・浙江省を中心とした土地登記関係の档案を閲覧する。小林は、1970年代の媽祖島における土地測量関係の史料を閲覧する。

8月30日（木） 国史館／桃園県

別行動の小林を除く七名で、国史館での作業を継続する。午前中で戸地図のデジカメ撮影が一段落ついたため、午後からは片山・大坪に荒武・田口・山本・下岸を加えた六名で戸地図のデータ入力を行う。稻田は、昨日に続き土地登記関係の档案を閲覧する。

小林は桃園県の農田水利会を訪問し、日本統治時代に作られた桃園大圳やため池のことについて聞き取り調査を行う。

8月31日（金） 国史館／桃園県

前日と同じく、小林は桃園での調査を行う。残る七名は、国史館にて戸地図のデータ入力を継続する。

9月1日（土） 国立中央図書館台湾分館（以下、台湾分館と略記。新北市中和区）／故宮博物院図書文献館（台北市）

片山・小林・荒武の三名は、台湾分館で民国期の地政関係の書籍・雑誌を閲覧し、内政部編印『中華民國地政史』（1993年）等を撮影する。稻田・田口・大坪・山本・下岸の五名

³ 第四区の戸地図については、一件文書とともに、次号のニュースレターで紹介する予定である。

は、午前中に故宮博物院図書文献館にて族譜を中心に資料を検索し、午後からは書店にて関連書籍を収集するなどして過ごす。

9月2日（日）　台湾分館

小林・稻田・荒武は、他のメンバーより帰国が早いため、台湾分館での作業を終えるべく事前に書庫から出して取り置いてもらっていた資料の閲覧・コピーを行い、『浙江臨安県農村調査』（1931年）等を撮影する。残る五名は自由行動とし、行天宮を見学するなどして過ごす。

9月3日（月）　国史館

片山・荒武・田口・大坪・山本・下岸の六名にて、国史館での作業を再開する。戸地図のデータ入力を行い、作業の約95%を済ませる。

この日、小林・稻田が帰国する。

9月4日（火）　国史館

戸地図のデータ入力を終えた荒武・田口・山本・下岸は、2012年3月から開始した作業、すなわち1930年代・40年代に南京市が実施した土地登記において土地一筆ごとに作製された文書（「一件文書」）の閲覧に取りかかる。この資料は、膨大な量が国史館に所蔵されているが、旧第四区に重点をおいてデータを入力し、重要になりそうなものをデジカメで撮影していく。片山・大坪の二名は、戸地図のデータ入力を継続し、作業を完成させる。

9月5日（水）　国史館

片山・荒武・田口・大坪・山本・下岸の六名で、南京市第四区の土地登記に関する一件文書の閲覧・データ入力を行う。この文書は一件当たりの情報量が非常に多いため、一人あたりのデータ入力は、一日10件程度にとどまった。

9月6日（木）　国史館

片山・田口・大坪・山本・下岸の五名で、土地登記に関する一件文書のデータ入力に没頭する。当初の予想以上に時間がかかり、作業は難航する。

この日、荒武が帰国する。

9月7日（金）　国史館

終日、土地登記に関する一件文書のデータ入力を行う。また、重要になりそうな資料はデジカメ撮影を行う。

9月8日（土）　台湾分館／台湾大学図書館（台北市）

片山は台湾分館にて、大坪は台湾大学図書館にて資料の閲覧・コピーを行う。残る三名

は、関渡廟の見学、関連書籍の収集などをして過ごす。

9月9日（日）

この日、片山が大阪大学文学研究科の略称 OVC プログラム（「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」[日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」]）の企画である「横断的研究視察 台湾スタディツアーハイ」に引率教員として参加するため、中央研究院活動中心に移る。残る四名は自由行動とし、関連書籍を収集するなどして過ごす。

9月10日（月） 国史館

田口・大坪・山本・下岸の四名で、南京市第四区の土地登記に関する一件文書の閲覧・データ入力を再開する。先週同様、重要になりそうなものはデジカメで撮影する。

9月11日（火）【台北発⇒関空・セントレア着】日本航空 JL816 便など

田口・大坪・下岸が帰国。山本は、中央研究院や故宮博物院で引き続いて科研の調査を行うために中央研究院活動中心に移る。

2. 南京調査（2012年12月16日～12月27日）

12月16日（日）【関空発⇒上海浦東着、上海駅⇒南京駅】日本航空 JL891 便など

片山剛（大阪大学教授）・田口宏二朗（大阪大学准教授）・山本一（大阪大学特任研究員）が関西国際空港から上海浦東空港に到着。中部国際空港から来た大坪慶之（三重大学准教授）と合流して上海駅へ行き、そこから高速鉄道で南京へと向かう。あいにくの雨天や混雑もあり、上海・南京市内ともに移動に大変苦労した。

到着後、宿舎の中山大厦にて南京大学歴史学系のテムル副教授の歓待を受ける。

12月17日（月） 江蘇省档案館（南京市鼓楼区）／南京市档案館（南京市玄武区）

調査を開始する。午前中は、江蘇省档案館へ行く。目録を検索し閲覧を申請するも、デジタル化を行う作業中のため不可との回答であった。そこで午後、予定を変更して南京市档案館へと移動する。目録や新しく発行された『南京市档案館指南』を見る。そこに、南京市人民政府房地産管理局製の地籍図を収録した『南京市五百分一房地産平面圖』（1951年8月測製、1953年4月出版）が掲載されていることを発見する。

夜、テムル副教授と会食する。

12月18日（火） 南京市档案館

終日、南京市档案館で作業をする。片山・大坪は、昨日発見した地籍図を閲覧する。デジカメ撮影の許可は四枚のみであったため、形状や凡例を中心にメモを取る。田口は他項

権利や銀行、訴訟関係の史料を、山本は 1950 年代に行われた「査田定産工作」の史料およびその時に作られた村ごとの絵地図を見る。

夜、荒武達朗（徳島大学准教授）が南京に到着する。

12月19日（水）南京市档案館

朝、出張から戻ってきた南京大学歴史学系の夏維中教授およびテムル副教授と朝食を共にし、調査の打ち合わせを行う。その後、荒武を加えた総勢五名で南京市档案館へ移動し、調査を継続する。片山は、江心洲の堤防修築や被災状況の史料を、田口は昨日に引き続き他項権利・銀行・訴訟関係、荒武・大坪は八卦洲の蘆葦に関する史料を、山本は査田定産工作時に作製された表や地図を中心閲覧する。

夜、夏維中教授・張学鋒教授（南京大学歴史学系）・テムル副教授と会食する。

12月20日（木）江寧区档案館（南京市江寧区）

この日は、江寧区档案館へ行く。同館への訪問は初めてということもあり、午前中は目録を検索し、所蔵史料を調べる。午後、片山・大坪は 1920 年代の江心洲開発過程で起こった事件に関する史料を、田口は法院関係の史料を閲覧する。荒武・山本は、荒武が今回新たに持参したハンディ・スキャナーを用いて史料のスキャンを行う。

12月21日（金）第二歴史档案館（南京市玄武区）／南京市档案館・江寧区档案館

午前中、片山は南京大学にて、「珠江三角洲地区漢族齊民社会的誕生及其特質」と題する講演を行う。残りの四名は、第二歴史档案館を訪れる。しかし、書庫整理中のため目録および史料の閲覧がかなわず、予定を変更して南京市档案館へ移動する。午後に、講演を終えた片山が合流する。片山は江心洲の堤防修築・被災状況、荒武・大坪は八卦洲の蘆葦、山本は査田定産工作に関する史料を閲覧する。田口は江寧区档案館へと向かい、昨日終えられなかった作業を継続する。

12月22日（土）

文書館が休みのため、午前中は南京市档案館で山本が発見した、査田定産工作時に作製された地図に描かれた土地へ行ってみる。山本発見の地図は多数にのぼるため、その中から比較的交通アクセスのよい現在の雨花台区（南京城中華門の南側郊外）の村を選ぶ。しかし、そこは今では電子部品関係の工場を建設して「シリコンバレー」とするために村全体が移転しており、農村の面影は全くなかった。午後は書店にて、地政関係の書籍を収集する。

この日、稻田清一（甲南大学教授）が南京に到着する。また、南京大学・南京師範大学にて講演予定の森正夫名古屋大学名誉教授も合流して、夏維中教授・テムル副教授と会食する。

12月23日（日） 江心洲（南京市建鄴区）

科研メンバー六名に森教授を加えた総勢七名で、江心洲へ行く。江心洲は、2006年12月と2008年9月の二回、景観観察および古老への採訪を実施した場所である⁴。以前から開発計画があると聞いていたが、実際に見てみると長江本流部分にトンネルができて北岸とつながり、南岸の夾江との間にも橋が架けられ交通が便利になったことで、すでに近郊住宅用のマンション等の建設が始まっていた。橋梁やトンネルから離れた部分では、まだ開発が及んでいない可能性もあると考え洲を一周してみたが、農地は減り昔の景観は失われていた。また、残された民家や洲泰村村民委員会にも、壁面に「搬遷」の文字が朱で塗られ、集団移転が進んでいる様子も窺えた。そのため、今後江心洲では古老への採訪もほとんど不可能であろうと考えられる。

夜、調査協力を依頼していた朱海濱教授（復旦大学中国地理歴史研究所）が南京に到着する。

12月24日（月） 南京市档案館／南京城内中華門西側（南京市秦淮区）

午前中は、南京市档案館で作業を行う。片山・朱は江心洲の開発に関する史料を、稻田は長江の北岸沿いに位置する中洲である九袱洲に関して、田口は他項権利・銀行・訴訟関係、荒武は八卦洲の蘆葦についての史料を閲覧する。大坪・山本は、江心洲の堤防修築に関する史料を読み上げ、データをエクセルに入力する。

午後、張学鋒教授の案内で、南京市街地の旧四区の古い建築群を見学する。夏維中教授のご息女にも、住人への聞き取り調査に協力してもらう。旧四区は、中華門から城内に入ってすぐ、中華路の西側に位置しており、夏に台湾の国史館で1930～40年代にかけて実施された土地登記の際に作製された戸地図および登記文書のデータを取っていた場所である。家屋の多くは現在も人が住んでおり、住人に話を聞き、実際に敷地内を見せていただくことで、戸地図に描かれてはいるものの、具体的には不明であった部分をイメージすることが可能となった。

調査後、翌日の帰国に備え、荒武が上海に移動する。夜、夏維中教授・テムル副教授・胡正寧氏（南京大学歴史系弁公室主任）および新疆から南京大学へ研修に来ている訪問団と会食する。

12月25日（火） 南京市档案館

片山・田口・大坪・山本の四名は、朱海濱氏とともに終日、南京市档案館で作業を続ける。稻田は、午前中に南京大学で講演を行い、午後から合流する。夜、稻田は南京大学留学時の旧友と会食し、他の者は森正夫教授と会食する。

⁴ 過去の調査の詳細は、大坪慶之・片山剛「2006年南京市江心洲調査報告」『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』2、2007年、pp.141-156、ならびに片山剛「2008年南京市江心洲調査報告」『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』4、2009年、pp.149-154、参照。なお、片山が単独で2007年7月に短時間の採訪を行っている。大坪慶之・片山剛「2007年海外調査活動記録」『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』3、2008年、pp.71-72、参照。

12月26日（水）南京市档案館／八卦洲（南京市栖霞区）

片山・稻田・田口・山本は南京市档案館にて、作業を継続する。これまで閲覧した資料のデジカメ撮影を申請したところ、「閲覧者自身が撮影してはいけない」との規定のため、档案館の職員に持参した EOS Mark II やマンフロット等の機材を使用して代行してもらう。撮影にあたっては、山本が補助を行う。残る片山・稻田は、次回の調査に備えて所蔵目録を、田口は他項権利・銀行・訴訟関係の史料を閲覧する。

朱海濱氏と大坪は、夏維中教授と八卦洲を訪問する。当日はあいにくの雪のため、八卦洲街道弁事處で曹徳強氏（弁公室主任）の話をうかがった後、古い集落や最上流部分を見学するにとどまる⁵。午後、両名は南京市档案館へと向かい、片山らと合流。朱は昨日までの史料閲覧を継続し、大坪は山本とともにデジカメ撮影の補助に回る。

12月27日（木）【南京駅⇒上海駅、上海浦東発⇒閑空着】日本航空 JL898 便など

片山・稻田・田口・大坪・山本の五名は、午前中に高速鉄道で南京から上海へ移動する。行動を共にした森正夫教授・朱海濱氏と上海駅で分かれ、夕刻の便で上海浦東空港から帰国する。

3. 広東調査（2013年3月17日～3月27日）

3月17日（日）【閑空⇒広州着】中国南方航空 CZ390 便

片山剛（大阪大学教授）、山本一（大阪大学特任研究員）の両名が広州に到着。宿舎は広州賓館。夕刻に、広東省社会科学院歴史研究所の陳忠烈氏と今回の調査についての打ち合わせを行う。

3月18日（月）【広州⇒高要市金利鎮着】

早朝、片山・山本は陳氏と合流し、広州市内から高要市金利鎮へタクシーで移動する。金利鎮での宿舎は固吉酒店。午前中は金利鎮政府を訪問し、政府関係者および調査予定地である旧金東団内の村民委員会幹部から金利鎮や各村民委員会の概況を聞く。

午後は今回の調査対象である旧金東団の堤防を一周して参觀する。

3月19日（火） 金利鎮金二村民委員会

午前・午後とも金二村民委員会の古老を探訪する⁶。前回の調査で非常に興味深い口碑資料を提供してくれた古老を再度採訪し確認を行う。採訪場所は金二村民委員会。採訪中、金二村民委員会の書記が、当該村の衛星写真（縮尺 1:2500。撮影時期不明だが、近十年であろう）を参考提供してくれた。今後の実地調査に大いに資する材料となるだろう。夕刻、

⁵ 本ニュースレターの「2012年12月南京八卦洲訪問記録」、参照。

⁶ 金利鎮での採訪内容については、本ニュースレターの「2013年3月高要市金利鎮調査記録」、参照。

古者の案内で金二村の農地を参観する。

3月20日（水） 金利鎮振星村民委員会

午前・午後とも振星村民委員会の古者を採訪する。振星村はこれまで採訪を行っていない村である。採訪場所は振星村民委員会。夕刻に、古者の案内で振星村内の祠堂や社稷などを参観する。なお、振星村でも衛星写真を参考提供してもらった。

3月21日（木） 金利鎮金江村民委員会

午前・午後とも金江村民委員会の古者を採訪する。採訪場所は金江村民委員会。金江村（旧称は白藤岡村）の集落に近在する複数の「望歩（ランプ）」（日本の小字に相当）について、1934年作製の白藤岡郷絵図と対照しながら、土地改革前後に帰属の変化があったかどうかを中心に採訪を行った。夕刻に、古者の案内で村内の祠堂や、かつての村の境界等を参観する。なお、金江村でも衛星写真を参考提供してもらった。

3月22日（金） 金利鎮金一村民委員会

午前・午後とも金一村民委員会の古者を採訪する。採訪場所は金一村民委員会。また、金江村でも衛星写真を参考提供してもらった。夕刻、採訪を終え、宿舎に戻ったのち、広州に向けて出発。広州での宿舎は華廈大酒店。広州到着後、陳忠烈氏と一旦別れる。

3月23日（土）

広州市天河区の広州購書中心で研究課題に関連する書籍を購入する。

3月24日（日）

宿舎にて、金利鎮調査で撮影した写真、録音等の資料の整理を行う。

3月25日（月） 広東省档案館（広州市天河区）

午前中、陳忠烈氏と再会し、広東省档案館で資料調査を行う。片山は民国期の金東園に関する档案を、山本は土地改革期の档案を目録から探す。それぞれ目的の档案がみつかるが、閲覧手続等に予想以上の時間を要し、本格的な閲覧は次回以降に持ち越しとなる。

3月26日（火） 仏山市順徳区龍江鎮

20 数年前に片山が実地調査を行った龍江鎮を再訪する。午前は龍江镇政府関係者と会談し、午後は龍江鎮内の廟や祠堂などを参観する。夕刻に広州へ戻り、陳忠烈氏と別れる。

3月27日（水）【広州発→関西国際空港】中国南方航空 CZ389便

片山・山本が帰国。

2013 年度

1. 南京調査（2013年8月25日～9月7日）

8月25日（日）【関空発→北京経由南京着】中国国際航空 CA162→CA1561便など

片山剛（大阪大学教授）・田口宏二朗（大阪大学准教授）・山本一（大阪大学特任研究員）が関西国際空港から、大坪慶之（三重大学准教授）が中部国際空港から南京に到着。8月21日に南京入りし、すでに南京市档案館・南京大学等で調査を進めていた稻田清一（甲南大学教授）・荒武達朗（徳島大学准教授）と合流する。片山ら三名は、関西空港発の便が機材故障のため4時間遅れで出発し、午後11時過ぎに宿舎の中山大厦に入る。

8月26日（月）南京市档案館（南京市玄武区）

片山・田口・大坪・山本の四名は、南京大学のテムル副教授を訪問し、档案館利用のための紹介状を受け取る。その後、先に作業を開始していた稻田・荒武とともに、南京市档案館で調査を開始する。同档案館では、史料のデジタル化が進められており、国民政府期や日中戦争時期の南京市財政部档案等を、パソコンを用いて閲覧する。

夜、南京大学の范金民教授・夏維中教授・テムル副教授・胡正寧氏（歴史弁公室主任）と会食。前日に飛行機の遅れで伝えることの出来なかった本プロジェクトの趣旨について説明し、研究期間中の協力を依頼する。

8月27日（火）南京市档案館／南京大学歴史系（南京市鼓楼区）

この日は、二班に分かれて調査する。片山・田口・山本の三名は、南京市档案館に行き、前日の作業を継続する。片山は江心洲関係の档案を、田口は不動産登記に関する史料を、山本は査田定産工作について調査する。稻田・荒武・大坪の三名は、南京大学歴史系でデジタル資料の検索・閲覧を行う。作業は主に『申報』に掲載されている、八卦洲・大小黄洲に関する記事の収集を中心に行う。

8月28日（水）南京市档案館／南京図書館（南京市玄武区）

片山・田口・山本の三名は、昨日に引き続き南京市档案館を訪れる。片山・山本は前日からの作業を継続し、田口は法院関係の档案を閲覧する。稻田・荒武・大坪の三名は、南京図書館へ向かい関係史料を探す。その結果、近年『民国史料叢刊』（正編・続編）および『二十世紀三十年代国情調査報告』という大部な叢書が出版されており、その中に南京図書館では原件の閲覧が不可となっている民国期の文献も含めた、本科研に有用な史料が影印されていることが判明する。

二日後に稻田・荒武が帰国することもあり、范金民教授・夏維中教授・張学鋒教授（南京大学歴史系）・テムル副教授・胡正寧氏と会食し、二人の調査に対する協力のお礼をする。

8月29日（木）南京市档案館／南京図書館

片山・荒武・大坪の三名は、江蘇省档案館に赴くも、民国期の史料がデジタル化作業のために閲覧不可となっていたので南京図書館へ行く。片山は、昨日見つけた『民国叢書』『二十世紀三十年代国情調査報告』所収の史料を、荒武は『中央日報』の記事を、大坪は安徽全省無為県の地方志を閲覧する。稻田・田口・山本は南京市档案館を訪れ、作業を継続する。

夜、夏維中教授・テムル副教授・胡正寧氏と会食する。

8月30日（金）南京市档案館

片山・田口・大坪・山本の四名で、南京市档案館に行く。片山・大坪は档案館備え付けのパソコンを用いて、それぞれ江心洲の農会関係、八卦洲の蘆柴関係のデジタル資料を閲覧する。田口・山本は原文書を申請し、銀行档案ならびに查田定産工作に関する史料を閲覧する。

この日、稻田・荒武が帰国する。

8月31日（土）南京図書館

片山・田口・大坪・山本の四名で、南京図書館で調査を行う。午前中、片山・大坪は『申報』収載の永定洲（江心洲の五洲のうちの一つ）関係の史料を探す。田口は法院関係の史料を、山本は查田定産工作に関する文献を閲覧する。午後、片山・山本はこれまでに見た史料を撮影する。田口は午前中の作業を継続し、大坪は『申報』に掲載された八卦洲関係の史料を集めることとする。

夜、別の仕事で南京滞在中の水盛涼一氏（東北大学助教）・三田辰彦氏（東北大学大学院・南京大学留学中）と会食する。

9月1日（日）八卦洲（南京市栖霞区）

日曜日は文書館が休みのため、八卦洲の景観調査を行う。午前中は最も古い町である Tuo (偏が「車」、旁が「它」の一字) 路街へ行き散策する。付近の農地では、とうもろこし・大豆・へちま等が栽培され、なかでも Luhao (蘆藁、日本名「かわらにんじん」のことと思われる) と呼ばれる作物が、南京市政府の奨励で広く作付されていた。また、排水用と考えられる水路も多く見られた。午後は、洲の北西側から南西側の長江沿いの堤防付近および七里村を散策した。八卦洲は現在の江心洲とは違い、全体として開発が進んでいない場所が多い印象を受けた。

9月2日（月）南京市档案館／南京図書館

片山・大坪は、南京市档案館にて備え付けのパソコンを使い、江心洲・八卦洲関係のデジタル資料を見る。同じく山本は、查田定産工作関係の档案を申請し閲覧する。田口は南京図書館へと向かい、近代報刊データベースで『申報』や『益世報』などのジャーナル史料をダウンロードする。

9月3日（火）南京市档案館／南京図書館

片山・大坪・山本の三名は南京市档案館へ行き、作業を継続する。田口は前日に続いて南京図書館を訪れ、法院・市政府関係資料を閲覧する。

9月4日（水）八卦洲

テムル副教授に同行をお願いして、八卦洲で聞き取り調査を行う。まず最初に八卦洲街道弁事処を訪ね、弁公室主任の曹徳強氏に挨拶する。その後、同処民政弁公室副主任の吳昌明氏の案内で、五人の古老を採訪する⁷。

夜、范金民教授・夏維中教授・黃建秋教授（南京大学歴史系）・テムル副教授・胡正寧氏と会食する。

9月5日（木）南京市档案館／南京図書館

片山・大坪・山本の三名は南京市档案館へ行き、作業を継続する。田口は別行動を取つて南京図書館を訪れ、史料の収集に努める。

夜、范金民教授・張学鋒教授・黃建秋教授・テムル副教授・胡正寧氏と会食し、今回の調査のお礼をするとともに、来年度の再訪時の協力を依頼する。

9月6日（金）南京市档案館／南京図書館

片山・山本は南京市档案館へ行き閲覧した史料の複写・デジカメ撮影を行う。田口・大坪は南京図書館を訪れる。田口は、民国文献および先行研究の収集を行う。大坪は、南京市档案館で見た史料と関連する記載を、当時の新聞デジタル資料から集める。

夜、南京留学中の藤井元博氏（慶應義塾大学博士課程・南京師範大学留学中）と会食する。

9月7日（土）【南京発⇒北京経由閏空着】中国国際航空 CA1818→CA161 便など

片山・田口・大坪・山本の四名が、調査を終えて帰国。

2. 台湾調査（2013年12月20日～12月27日）

12月20日（金）【閏空発⇒台北着】日本航空 JL813 便

片山剛（大阪大学教授）・山本一（大阪大学特任研究員）・八木啓俊（大阪大学学部生）の三名が、関西国際空港から台北に到着。宿舎は福華国際文教会館。

12月21日（土） 国立台湾図書館（館名が国立中央図書館台湾分館から変更されている。

新北市中和区、以下台湾図書館と略す）

片山・山本・八木の三人は、台湾図書館にて調査を開始。片山は民国期の広東省高要県

⁷ 八卦洲での採訪内容については、次号ニュースレターで若干紹介する予定である。

の「田畠調査冊⁸」のマイクロフィルム 3 リールを申請・閲覧する。夕刻までに閲覧した結果、「高要第八區西約鄉覗東村田畠調査圖冊」⁹が有用と判断し、翌日にプリントアウトすることにした。山本は民国期の広東省の水利・水害関係の史料や、広東陸地測量局の作業規定などをまとめた書籍を申請・閲覧する。八木は片山・山本の申請・閲覧の補助を行う。

12月22日（日）　台湾図書館

片山・山本・八木は、台湾図書館で作業を継続する。台湾図書館での作業はこの日が最後になるため、片山はマイクロ史料「高要第八區西約鄉覗東村田畠調査圖冊」のプリントアウト作業にとりかかる。当該史料は非常に大部のため作業は夕刻までかかった。山本は前日に申請した諸史料を閲覧し、コピーを申請する。また民国期のジャーナル史料の収集にもつとめる。八木は主に片山の作業の補助を行う。

この日、稻田清一（甲南大学教授）・荒武達朗（徳島大学准教授）・田口宏二郎（大阪大学准教授）・大坪慶之（三重大学准教授）の四名が台湾に到着する（JL813 便など）。また別科研で調査に来た小林茂（大阪大学名誉教授）も片山らと合流する。

12月23日（月）　国史館（新北市新店区）

総勢八名にて、国史館での調査を開始する。まず午前中に目録の検索および申請を行い、午後から档案を閲覧する。片山・大坪は、昨夏の調査から継続して、所有権登記に関する一件文書を読み、データをエクセル入力する。小林・稻田・荒武・山本・八木は、南京市の郊外を対象とした 1930 年代作製の「郊区地籍図」を閲覧する。これは、航空写真を使って地籍原図を作製する過程のものと推測され、興味深い史料である。田口は、司法関係の史料を閲覧する。

12月24日（火）　国史館／国家図書館（台北市）／桃園県など

この日は、三班に分かれて調査を行う。片山・稻田・田口・大坪・山本・八木の六名は国史館へと向かい、前日の作業を継続する。荒武は、国家図書館および台湾図書館にて、民国期の南京への移民に関する史料を博搜する。小林は、戦前の日本統治期に作られた桃園大圳の調査を行う。

夜、巫仁恕副研究員（中央研究院近代史研究所）ならびに台湾滞在中の大澤顕浩教授（学習院大学）・高津孝教授（鹿児島大学）と会食する。

12月25日（水）　国史館／国家図書館／桃園県など

この日も三班に分かれて、前日の作業を継続する。国史館では、片山・大坪が、旗地に

⁸ 「田畠調査冊」については、片山剛「1930 年代広東省の「田畠調査冊」の性格と作製経緯」『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』1、2006 年、pp. 2 - 13 参照。

⁹ 覗東村は現在の覗崗鎮内の村と推定される。覗崗鎮は、2013 年 3 月に調査し、2014 年 3 月にも調査を予定している高要市金利鎮に隣接する鎮である。当時の覗東村は西約郷内の一村であり、本史料は覗東村の全 79 段の農地に関する 1934 年 6 月の調査記録である。

設定された他項権利を含む所有権登記に関する一件文書を閲覧する。稻田・山本・八木は、「郊区地籍図」のうち南京市街地の北側にある燕子磯付近を中心に見て、グリッドを作製する。その結果、地籍図が長江以南までしか所蔵されていないことが判明する。これは、日中戦争前の南京市政府による地籍図作製が、中洲である八卦洲や長江北岸には及んでいなかったことを想起させ、興味深い。田口は档案の閲覧を継続する。

荒武はこの日も国家図書館へと向かい、文史資料ならびに戦後に中国大陆の空中撮影を行ったアメリカ軍の偵察機 U-2 関係の資料を探す。小林は桃園での調査を継続する。

夜、池田若菜さん（台湾師範大学台湾史研究所・修士課程）と会食し、小林の桃園調査への協力に対するお礼を行う。

12月26日（木） 国史館／中央研究院

前日のメンバーに荒武を加えた七名で、国史館での作業を継続する。所有権登記に関する一件文書は膨大な量が所蔵されているとともに、登記過程も錯綜しているために内容の把握に時間がかかり、作業が難航する。

午後から、午前中に范毅軍研究員（中央研究院歴史語言研究所）を訪問した小林が国史館での作業に合流する。そして閲覧中の地籍図について、作業方法や作製年代に関して議論する。

12月29日（金） 国史館／台湾図書館

片山・稻田・荒武・田口・大坪・山本の六名は、国史館にて申請済みであった土地登記関係の一件文書、地籍原図の閲覧、エクセルデータ入力、写真撮影を済ませる。小林は、台湾図書館へ行き作業を行う。

この日、八木が帰国する（JL816便）。

12月28日（土）【台北発⇒関空着】日本航空 JL816便など

片山・小林・稻田・荒武・田口・大坪・山本の七名が、調査を終えて帰国する。

おわりに

中国明清～近現代史を研究する者にとって、今や現地調査は必須の仕事となりつつある。ただ史料調査・実地調査の両方において、様々な困難が発現している。史料調査においては、文書館の対応に問題があったり、档案のデジタル化を進めているため、希望する档案が閲覧不能であったりすることは、多かれ少なかれ経験することであろう。さらに性急にデジタル化を進めているからであろうか、デジタルファイルが本来の档案のページ順に並んでいなかったり、欠損・重複したりすることもしばしば見られた。

実地調査においては、採訪対象となる古老が稀少になりつつあり、また中国の経済発展にともなう「都市化」の潮流により、農村が開発され、旧来の姿を急速に変えつつある。現地調査の困難さと早急に実施する必要性を改めて痛感した次第である。